

新春のご挨拶を申し上げます



希望に満ちた新年をお迎えのことと思います。今年はSDGsの意欲的な目標に世界が合意してから10年、目標年2030年まで残すところ5年となりました。コロナ禍で様々な保健事業が停滞し昨年5月に刊行されたWHOの年次統計報告書では、ここ10年の進歩が水泡に帰したとまで書かれています。それを取り戻し更に前進を図らねばならず、WHOは新中期事業計画(GPW14)を開始し、Global FundやGaviは次の中期計画を実行すべく増資会合を開催する準備を進めています。新たな活動には人材が必要。しかし国際競争は厳しさを増しています。そのようなポジティブな面と困難が入り混じった状況であればこそ、皆さまがチャンスを勝ちとられて世界に飛躍できるようグローバルヘルス人材戦略センターは今年も年明け早々活動を開始します。積極的なご参加をお待ちしています。

第9回国際臨床医学会学術集会報告

グローバルヘルス人材戦略センターは2024年11月23日に大阪府で開催された標記集会に積極的に参加しました。この学会は従来の低所得国の保健開発関係者が参加する国際保健医療学会とは異なり、インバウンド・アウトバウンドといった医療の国際展開に関わる方を中心とする若い学会です。センターとしては、これらの分野の人材をグローバルヘルスの新たな人材プールに加わって頂きたい毎年シンポジウムを企画して参加してまいりました。今年は「次世代医療人材：イノベーションと国際展開の融合と調和」と題するシンポジウムを行いました。登壇者と論点は右のとおりで、100人を超える参加者を得て活発な論議が行われました。

また、展示会場にセンターのブースを設け、活動の紹介を行いました。

登壇者と論点

パネルチェア：小野崎 耕平（一般社団法人サステナヘルス代表理事、元エゴンセンター東京オフィス）

パネリスト（アイウエオ順）：

国井 修（公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金（GHIT Fund）CEO）
日本発イノベーションの立場から

小松崎 涼子（Russell Reynolds マネージングディレクター・日本代表）
国際的エグゼクティブサーチファームのヘッドハンターの立場から

谷村 忠幸（クオリアス取締役副社長）
医療産業と世界公益を調和させる立場から

中田 研（大阪大学健康スポーツ教育研究環・環長）
次世代医療人材養成の立場から

中谷 比呂樹（グローバルヘルス人材戦略センター・ディレクター）
国際保健人材の立場から

Save the Date（今後の活動予定）

いずれも完全バーチャル方式で実施します。

1月9日（土）18～20時 Go Gavi セミナー

現役の邦人職員がGaviでの業務やキャリアを座談会方式でお話します

2月7日（金）18～20時 Go GF セミナー

Global Fundの役割と採用プロセスを説明します（内容調整中）

2月後半～3月前半
 （日時・名称・内容整中） キャリアアップの為のSNSセミナー

国際機関のポスト獲得に向けたSNSの活用法についての実践的セミナー

■ 人材登録のお願い

12月19日現在、954名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっていきます。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲

載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。

<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



Go UN Workshop / 個別受験相談会

12月7日(土)、WHO 西太平洋事務局(WPRO)の後援を得て、Tamas Landesz 管理・財務部長、Glenn Lawas 人事アソシエート、Mica Rhoberts Ornedo 人事アソシエートを講師に迎え、標記ワークショップを開催しました。今年は例年と趣向を変え、英文履歴書と参加希望表明書の選考に合格された23人の少数精鋭の候補者の方々にご参加頂きました。そして、参加者が筆記試験や面接等のリクルートメント・プロセスを現実に近い環境で体験できるように、演習やグループ・ワークを増やしました。参加者からも「実践的な内容が良かった」とのコメントが多く聞かれました。

翌8日(日)には、WPRO 講師3人による個別受験相談会が行われ、15人の候補者各々が、合格のための職務経歴の上手な説明の仕方、自分に見合ったポスト・レベルの選び方、面談の際の受け答えのコツ



等について相談されていました。

2日間を通じて、WPRO 講師も参加者のモチベーションや英語力の高さに驚いていました。本ワークショップと個別受験相談会は引き続き実施していきますので、ご関心のある方はぜひご応募ください。

グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいないためキャリアパスを具体的にイメージできないということです。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々にキャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させて頂いています。

第18回は、国立国際医療研究センター グローバルヘルス人材戦略センター 人材情報解析官の地引 英理子氏です。

第18回

インタビューー 佐藤のりこ



国立国際医療研究センター
グローバルヘルス人材戦略センター
人材情報解析官
地引 英理子 [じびきえりこ]

外務省に勤務する家族とともに、幼少期をアメリカ、ニュージーランド、ルーマニアで過ごす。東京大学大学院で国際関係論、日英外交史を専攻。在英国日本大使館の広報文化担当専門調査員として2年間勤務した後、ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー (JPO) として国連世界食糧計画 (WFP) へ。そこでグローバルヘルスに関心を持ち、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院で公衆衛生修士号、東京女子医科大学で博士号を取得。帰国後は外務省で日本における国際保健政策の策定に関わるとともに、NGO で国際保健分野(感染症、母子保健、リプロダクティブ・ヘルス、栄養など)の仕事に携わる。現在は国立国際医療研究センターグローバルヘルス人材戦略センターに所属し、自身の経験を生かして国連、国際機関、国際NGO への就職を希望する邦人の支援を行っている。

—国際関係への関心から、外務省の在外公館専門調査員に応募

子どもの頃に9年間海外で過ごしたのですが、そこでは日本についてよく質問されました。国際関係に興味を持ち、大学院で日英外交史を専攻したのもそういった経験が背景にあります。そして国連高等難民弁務官だった緒方貞子さんのインタビューを聴いたり、犬養道子さんの『人間の大地』を読んだことなどがきっかけで、実務を通じて世の中の役に立ちたいと考えるようになりました。外務省在外公館専門調査員の存在を知ったのはそんなときです。イギリスで日英文化交流を担当するポストに応募し、無事に採用され在英国日本大使館で2年間勤務しました。仕事内容は、文化交流イベントの開催やイギリスの子どもたちを日本へ招聘するプログラムの実施などさまざまです。専門調査員という立場ではありますが、大使館職員と同様の仕事を任せていただいたため大変やりがいがありました。この経

験は、後にジュニア・プロフェッショナル・オフィサー (JPO) に応募する際に役だったと思います。とはいえ、当時から将来を見据えてキャリアを積んでいったというよりも、国際貢献に携わりたいという内から湧き上がる思いに素直に従ったといった方がいいかもしれません。

—国連世界食糧計画 (WFP) の仕事から、グローバルヘルスへ関心を抱く

専門調査員の経験を通して本格的に国際機関で働こうという思いを固め、任期終了後に JPO へ応募しました。実は JPO で最も大変なことの一つが、受け入れ機関のポストとのマッチングなのです。私の場合も、採用はされたもののマッチングに1年、派遣までに1年半かかり、その間は宙ぶらりんになってしまいました。しかし「いずれは派遣されるだろう」と、アルバイトをしながらのんびり待つ姿勢で臨みました。現在このマッチングと派遣までの期間は短縮しているものの、不安になる方が多いのも事実です。しかし、やきもきしてせっかくの時間を無為に過ごしてしまうより「何とかなる」と大きく構えていただいた方がよいように思います。

WFP で最初に配属されたのは、東欧の国々に食糧援助を行う東欧局でした。途上国を希望していたので最初は残念に思いましたが、本部では本部や各部署の役割が分かり勉強になりましたし、やがて希望が通りラオスへの派遣が決まりました。ラオスで学校給食・学校保健に関わったことから、グローバルヘルスに深い関心を持つようになりました。

(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role_model/ でお読みいただけます。)